出会い（3）

――日本のいちばん長い日――

奥村　一郎

奥村　一郎 / おくむら・いちろう
1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、同大文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。
著書に、『断想』『主とともに』『友の祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

はじめに

ちょうど30年前、『日本のいちばん長い日』というタイトルの思い出の映画（＊1）があった。「思い出」と「記憶」とは同じようで、かなりちがっている。外国語にもたいてい、このようなふたつの区別がある。フランス語のsouvenir（スブニール、思い出）は今では、観光客相手の「おみやげ店」の看板になっている。souvenirはふたつの言葉、sous（下に）と、venir（来る）との合成語だそうである。「記憶」の種が個々人または国家、民族、さらに人類の歴史の大地に蒔かれて、やがてそこから芽が出て、花が咲くのが「思い出」である。記憶は時とともに流れ去るが、思い出は過ぎ去った出来事を今に生かす懐かしのメロディである。ドイツ語のGeschichite「出来事としての歴史」と、Historie「記録としての歴史」の区別とも似ている。

記憶は消えてゆく。しかし、思い出は時とともに深まることによって、その人、その国、その民族の歴史を養う糧となる。記憶は記録として残され、思い出は血となり肉となって、次の世代に命を伝える。記憶は文字になるが、思い出は活字にはならない。「不立文字（ふりゅうもんじ）。以心伝心」（＊2）という禅語に通ずる「心のことば」が思い出である。ことばや記録がなければ記憶は風化する。しかし、心の歴史である思い出は神と人とのひそかなる対話となって永遠につづく。

戦後すでに50年余、戦中世代が年ごとにすみやかに他界していく今、残されたもののささやかな戦争体験の思い出を残すようにとの友人・知人のすすめを素直に受ける気持になったのも年のせいかもしれない。老いのたわごとというようなことにしかならないであろうが、遠い思い出のつかぬ話のいくつかを記させていただく。

エノラ・ゲイ（Enola Gay）

一昨年、米国の首都ワシントンにあるスミソニアン航空宇宙博物館を訪ねた。1945年8月6日朝8時、広島に原子爆弾を投じたB29エノラ・ゲイの真っ白な巨体の側に立ったときには、一瞬、竜巻のように遠い思い出が噴きあげてきた。

ちょうどその日、私は三重県の鈴鹿山脈の裾にあった第三航空隊の青年将校として勤務していた。巨大な新型爆弾によって、広島市全体が一瞬にして灰燼に帰したというニュースが入ったのは、その2時間ほどあとのことであった。翌日、同僚に誘われて診察室に行ったところ、部屋のまん中に置かれた寝台の上に背を丸くして窓の方に向かい座ったまま、頭（こうべ）を垂（た）れ、じっとしていた兵士のうしろ姿を目の前にした。幅広い背中全体が、赤、青、黒の色で塗った地図のようであった。軍医と付き添いの仲間も、目を覆（おお）うようにして、一言もいえず、立っていた。元来血に弱いわたしは、側に近づいて慰める勇気もなかったことに、今なお胸が痛む。彼はまもなく悲しい地上を去って、神のみもとに行ったであろうと思い出すだけでも。

その頃から米軍機の空襲はいっそう激しさを増してきた。時に地上200メートルぐらいかと思うほど急降下して、兵舎をめがけて機銃掃射する。飛行士の真っ白な服装が鮮やかに見え、顔さえもわかった。悔しいがどうしようもない。われわれも航空隊でありながら、完全に米軍の制空下におかれてしまっていた。兵舎の周辺にいくつも防空壕を掘って、そこに身を隠すことしかなかった。原爆投下後は毎日のように、日本に降伏を迫る下手な字で書かれたビラが空からばらまかれた。そのビラを拾いながら破り棄て、敗戦の色濃くなった毎日を、血気にはやる青年将校の仲間同志で励ましあっていた。「われわれが弱気になったら、軍隊も日本国民もどうなるか‥‥？」と自らを叱咤する。毎日暗く、重苦しい空気に覆われていた。まもなく8月9日、広島につづく長崎への原爆投下。そして遂に日本は劇的な大戦の幕を閉じる羽目に追い込まれていった。

1945年8月15日（水曜）

わたしの記憶では、それほど暑くはない、明るく晴れた日だった。

天皇自身による重大ニュースの発表が正午にあるというので、全将校は正装でホールに集合するよう指示がでていた。

ホールの広かったせいもあっただろうが、当時のこと、ラジオの機能もよくない。なんとはなく弱々しい天皇の玉音は、うしろの方にいたわれわれにはほとんど聞きとれなかった。若者はいつどこでも、前進しか考えない。だからこそ若者であり、若者は社会のホープとなる。「今後ますます発憤して、鬼畜米英を一挙に粉砕壊滅せよ」という叱咤激励の詔勅であるにちがいないと思いこんでしまった。

神国日本にとって、敗戦全面降伏などということは、誰も考えようのない屈辱でしかなかったのが当時であった。まして、学も半ばに動員された若い学徒兵として祖国のために命を捧げたものは、耐えがたい挫折感に襲われた。たとえ、長く苦しかった戦争から解放された安堵感もあったというものの、全く予想もできない政治社会の混乱と、生活の貧困を思うと、台風の後に押し寄せる津波を待つような不安が日本全体に広がっていた。毎日のように飛びかう流言飛語におびえ、米軍の捕虜となる汚名を避けるため、隊長から部下のわれわれに、自決のための青酸カリが手渡された。

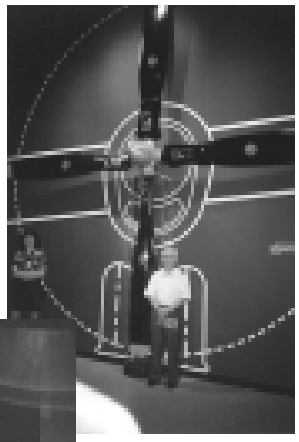
復員と復学

きわめて緊密であった軍隊の命令系統は、急に停電になったように寸断されてしまった。ひとつだけ奇異な公式通知がとびこんできた。「8月19日付、陸軍少尉に任命、従八位」というような証書が送られてきた。われわれ同期の見習士官への通知である。あだ名して「ポツダム少尉」といわれた。ポツダム会談（1945年7月17日〜8月2日）で連合敵国が日本の終戦申し込みを受諾したからである。「従八位」というのは、いちばん下位なのだろうが、とにかく意味も価値もないとしても、敗戦記念というにはおかしくもあり、哀れな思い出である。

「復員」という終戦用語も、今の世代には不可解なことばになってしまったようである。「召集」とか「赤紙」、「動員」とか「退役」など、やがて辞書の中からも消えていくことであろう。敗戦のために日本の軍隊が米軍によって解散させられ、全兵員に帰宅命令が出たことを「復員」という。学徒兵の場合には同時に大学に復帰したことから「復学」といわれた。わたしの場合、終戦1年前、1944年9月30日旧制一高卒、翌10月1日、東大法学部政治学科入学という形になっていた。「形」というのは、卒業試験も不可能な戦中の社会状況であったため、本人の希望と一高時代の内申書または調査書によって合否が決められたからである。

終戦2週間のあと、8月31日に復員。故郷でもある岐阜に住む両親のもとに帰ったが、終戦3週間前、7月23日（月）岐阜市は夜間大空襲によって全市街が廃墟と化していた。赤く錆びついたトタンを拾い、釘と針金で4本の丸太にしばりつけてつくったバラックが、わたしたち親子3人のやっと雨風をしのぐささやかな住み処（か）となった。

＊1 岡本喜八監督、1967年東宝作品
＊2 悟りは文字、言説（ごんせつ）をもって伝えるものではなく、心から心に伝わるものの意



スミソニアン航空宇宙博物館、エノラ・ゲイ展示前にて（1995年9月）